



海外展 「日本の考古 - 曙光の時代」開幕

7月24日(土)「日本の考古 - 曙光の時代」展が、いよいよ開幕しました。ライス・エンゲルホルン博物館(ドイツ連邦共和国マンハイム市)が会場です。ここで10月24日まで、次に会場をベルリンのマルチングロピウスパウ展示館に移して11月19日から来年1月31日まで開催します。その後、奈良国立博物館で帰国展を予定しています。

前日の激しい雷雨とはうってかわって、当日は好天となりました。開幕式には礼服を着こなした750名の方々が参加しました。その中に、町田章文化財研究所理事長をはじめ、田中琢前奈文研所長、都出比呂志大阪大学教授の顔がありました。

開会式では、ドイツ側からまずライス・エンゲルホルン博物館A・ヴィチョレック館長が挨拶に立ち、展示に携わった多くの方々の名前を一人一人紹介して、その労をねぎらいました。日本側からはまず在ミュンヘン清水陽一日本国総領事が、その後、長旅の疲れもあまりみせず町田理事長が奈文研の本展示会に協力した経緯とその成功を祈念する旨の挨拶をおこないました。その他にも、幾人もの方々の挨拶があったのは申すまでもありません。

開会式では、白いコスチュームを着た日本人女性



ドイツの博物館に並んだ平城宮出土品

による、日本でもめったにみることのできない前衛的な舞踊がありました。マンハイム市ではこの展覧会に併行して日本映画の上映などをおこないますので、この不思議な舞踊もドイツの方々が日本文化を広く深く知ろうとする現れなのでありましょう。事実展示室の休憩所にも、折り紙や囲碁が置いてありました。

参加者はそれぞれ、367ページにおよぶ厚い展示図録をお持ちでした。その写真は、発掘遺構は調査機関の撮影によるのですが、遺物写真はすべて今回の図録のために、奈文研スタッフの牛島茂、井上直夫、杉本和樹、中村一郎が、心を込めて新しく写したものです。それらは、いずれもドイツ側の細かい条件を満たしています。また本文は、奈文研の研究者ばかりか全国の研究者が担当して日本語原稿を作り、これをW・シュタインハウスさんとG・カストロップ福井さんがドイツ語に翻訳したもので、日本考古学の最新成果の一つです。展覧会が終わっても、きっといつまでも読まれるでしょう。

また展示法にも、随所に工夫が凝らされています。たとえば観客の順路と視線の位置を考慮し、遠近法的效果を利用したり、埴輪の目線を観客の目にぶつけたり、またあえて説明板をつけずに観客をじれさせたりと、これをみるのも楽しみの一つです。

遺物の集荷作業は、本年5月17日からでした。西日本を奈文研が、東日本を文化庁美術学芸課が担当しました。奈文研は全所協力して事にあたりました。なかには鹿児島県から最終集積場所の東京国立博物館までトラックで走った人もいます。その後成田から空輸し、日本とドイツが共同で点検し、展示しました。その過程で、事故があったのは残念でなりません。しかしドイツの多くの方々に見ていただき、日本文化を理解する上での一助になれば、と願っています。

(平城宮跡発掘調査部 深澤芳樹)

✿ 発掘調査の概要

石神遺跡 17 次調査（飛鳥藤原第 134 次）

「これ、なんやろ。」

「じょうごじゃないか。」

石神遺跡は、飛鳥資料館に展示されている須弥山石、石人像（共に重要文化財）が出土した遺跡です。これらは噴水施設に関連すると推定されています。

日本書紀には^{えみし}蝦夷、^{みしはせ}肅慎、^{はやと}隼人といった律令国家周辺の人々を迎えて飛鳥寺の西、あるいは甘樫丘の東の川上に須弥山を造り、饗宴をおこなったとあり、石神遺跡はこの饗宴施設であったと考えています。

1981 年以来、当研究所が継続的に調査を続けており、今回 17 回目を迎えました。調査区は遺跡の北側、昨年、一昨年の調査地点の東側にあたります。

石神遺跡といえば、掘立柱建物、石組みの溝や池、石敷きといった遺構が複雑に重なりあった状態で現われ、調査員の頭を悩ませることが多い遺跡ですが、2001 年の調査で中心施設の北限となる堀と溝が調査され、その北側は遺構が少なくなることが明らかになりつつあります。今回は、遺跡北側に想定される阿倍山田道との間がどのような状況であったのか検討をおこなうべく、調査を開始しました。

4 月から調査に入り、藤原宮の時期、飛鳥時代へと古い時代の遺構の調査へと進んでいきます。猛暑の中、遺構の確認作業を繰り返しました。



発掘された飛鳥時代以前の谷（南東から）

結果、今までの所見と同様に、飛鳥時代の遺構は少なく、調査区周辺は空間地であったようです。

何も無い、とがっかりしましたが、今回はこの部分を利用して、下層へと調査を進めました。

というのは昨年、一昨年の調査でこの周辺が沼のように水が溜まっていた状態であったことが明らかとなり、その性格を検討する必要があったのです。

調査区東側では礫が集中している部分があり、掘り進んだ結果、ここが東側の岸にあたることが明らかになりました。岸は急な傾斜を持っており、沼と考えられていたものはかつての飛鳥川に流れ込む支流が作り出した谷であったようです。平坦に見える遺跡周辺は、かつては今とは異なり、起伏のある地形だったのです。岸は調査区の中央で二又に分かれており、丁度谷の合流点を調査したことになります。

出土遺物によって古墳時代中期頃から埋没が始まり、飛鳥時代の初頭に最終的に整地がおこなわれていることが明らかになりました。

飛鳥時代の整地土からは冒頭のやりとりで話題となっている漏斗形の土器をはじめ、大型の須恵器の蓋、ガラス小玉の鑄型や^{ふいに}鞆の羽口といった通常の遺跡では出てこないような遺物が出土しており、調査区周辺の遺跡の性格の一端を示しています。

「なんやろな、これ。」

名案があれば是非御一報を。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部 金田明大）



出土土器・土製品 漏斗形土器は上の 2 点

平城京左京七条一坊十六坪の調査（平城第 372 次）

碁盤の目のように区切られた平城京の地番は、朱雀大路を中心に東を左京、西を右京とし、東西・南北に通じる大路によって区切られた約 530 m 四方の区画を「坊」と呼びます。さらにその中を 16 の区画に区切り、これを「坪」と呼びました。今回の調査地は、左京七条一坊の十六坪、国道 24 号線奈良バイパス柏木町交差点の南東にあたります。今からちょうど 10 年前の 1994 年におこなった第 251 ～ 255 次の各調査で、約 130 m 四方にわたるこの十六坪のほぼ四分の三を発掘しています。今回はこのときに調査できなかった坪西半の中央部を 6 月 7 日から 7 月 23 日にかけて調査しました。

検出した奈良時代の主な遺構には、調査区の北辺で東西 45 m 分を検出した幅約 1.7 m の素掘溝 1 条、溝の南に沿うかたちでつくられた東西堀 3 条や、掘立柱建物などがあります。この東西溝は、東側の調査区においても確認されており、ちょうど坪を南北に二分する位置にあることから、地割溝であった可能性が指摘されています。

今回の調査は、市街地化のすすむ平城京跡にあって、一つの坪のほぼ全体を調査することのできた数少ない例といえます。従前の成果と合わせて、平城京内の土地利用のありかたを検討することが調査後の課題です。

（平城宮跡発掘調査部 次山 淳）



調査区全景（北東から）

旧大乘院庭園の調査（平城第 374 次）

興福寺から南に下り、奈良ホテルの建つ朝香山の南麓に、旧大乘院庭園があります。大乘院は、一条院と並ぶ興福寺の門跡寺院で、室町時代・宝徳 3 年(1451)の徳政一揆で焼亡した後に、尋尊によって復興されました。その庭園は、江戸時代末まで南都随一の名園と謳うたわれました。

1995 年からの継続的な調査によって、現在庭園の中心に位置する東大池の西方に、西小池の存在が確認されました。今回の調査は、西小池の中央部と想定される部分と、東大池の西南隅を対象としています。調査は 7 月 26 日から開始し、現在も継続中です。

このうち西小池の調査では、想定とほぼ同じ位置で、西小池中央部の東西岸の汀線と、「ヲシマ」と呼ばれる池の中島、またその南西に位置する小島を検出しています。興福寺所蔵『大乘院四季真景図』で、これらは「連つらなりハシ」によって結ばれて描かれており、今後の調査でその全貌が現れるものと思われます。

東大池西南隅部は、昨年秋におこなわれた調査の追加調査です。前回、近世の岸の下層で部分的に検出した入り江状に広がる洲浜の確認を目的としています。大乘院庭園のあるこの地は、平安時代は元興寺の別院・禅定院であったことが知られていますが、出土遺物によりこの洲浜が禅定院時代の遺構である可能性が指摘されています。今回の調査で、さらなる成果が期待されます。

残暑のなか、発掘調査は 10 月下旬まで継続する予定です。

（平城宮跡発掘調査部 大林 潤）



調査区西半（北東から）



写真1:平城宮第一次大極殿院 1/100 模型
(1993年度製作、平城宮跡資料館)

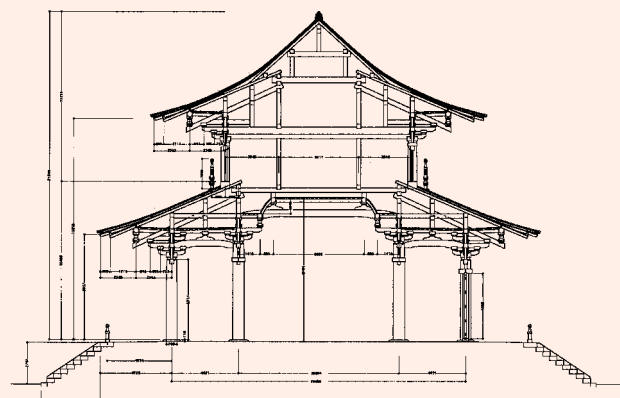


写真2:平城宮第一次大極殿 1/10 模型(左)、同梁間断面図(右、S=1/500)
(1995年度製作、遺構展示館)



写真3：平城宮第一次大極殿 1/5 構造模型
(1999年度製作、資材保管加工棟、撮影：(財)文化財建造物保存技術協会)

平城宮第一次大極殿の復元検討模型

平城宮跡では、現在、文化庁による第一次大極殿の復元事業が進められています。奈良国立文化財研究所(当時)は、その基本設計に至るまでの過程を担当してきました。基本設計の検討過程で作製してきたのが、これら3種類の模型です。最初に作製したのが、写真1の大極殿院全体の復元模型です。引き続き、大極殿本体の復元原案検討のために作製したのが、写真2の1/10模型です。この案は唐招提寺金堂の構造形式に二階部分を載せる形式で設計されています。身舎に大梁を架け、その上に天井を載せるところに最大の特徴が見られます。

この後、より具体的な基本設計案へと検討を進める過程で、構造についての考え方を大きく変更することになりました。写真3の1/5構造模型が、その改定復元案を反映したものです。1/10模型と比べて、とりわけ内部の構造に大きな変更が見られます。一階の柱を身舎、庇ともに同高に揃え、また、身舎内部から見える場所には大梁をかけず、長大な支輪で折り上げた天井を高い位置に張ります。いわば上方へ膨らむような内部空間を持つこの構造形式は、古代唯一の二階建金堂が残る法隆寺金堂を参照したものです。1/5ともなると、小住宅ほどの大きさがあり、模型といえども実施時同様に木材を正確に刻む必要が生じますし、部材同士の組み合わせ方や、デザイン、技法の詳細な検討が可能となります。ここでの検討と修正を重ねて、実施のための設計へととどり着きました。

復元建物が建つ過程では、膨大な検討が積み重ねられます。その過程を具体的なかたちとしてみせてくれるこれらの模型は、いま建ち上がりつつある大極殿本体と同等の価値を持っていると、私たちは考えています。

(文化遺産研究部 清水重敦)

研究室紹介

埋蔵文化財センター 遺物調査技術研究室

遺物調査技術研究室では、遺跡出土動物遺存体、つまり動物考古学の研究を主にし、さらに環境考古学一般へも研究の対象を広げています。室長の松井章は奈良文化財研究所に勤務して以来、平城調査部勤務であった最初の2年間を除いて、約20年間、埋蔵文化財センターで環境考古学や人骨、動物骨の研究を担当し、動物考古学の研究を続けてきました。この分野の研究の特徴は、可能な限り多くの現生骨格標本を収集することから始まることで、遺跡出土の破片となった動物骨と見比べて、動物の種類や性別、年齢、大きさなどを推定するところにあります。したがって、研究室には3000点を越える原生動物の骨格標本が備えられ、今も新しい標本が作製されています。また当研究室は、京都大学大学院人間・環境学研究科の学生も受け入れ、学生の教育にも励んでいます。以下に研究室の研究メンバーの紹介をします。

宮路淳子は、京都大学大学院で博士号を取得し、現在、奈良文化財研究所客員研究員、京都文教大学非常勤講師として研究に励んでいます。

藤井裕之は、博士課程4年であり、これまで弥生時代の木材の樹種選択と製材技術の研究をおこない、現在は対象を広げて、日本原始古代の木材利用史を研究中です。考古学の立場から樹種同定、年輪計測の技術を身につけ、今後が期待されます。

石丸理恵子は、博士課程3年で、広島県帝釈峡遺跡群出土の動物遺存体の研究をおこなっています。

丸山真史は、博士課程1年で、神戸市兵庫津、尼崎市大物、大坂城下町など、中世から近世にかけての遺跡出土の動物遺存体を研究中です。

菊池大樹は研究生で、これまで中国考古学を学び、さらに動物儀礼の研究のため、当研究室で中国で出土する可能性の高いウシ・ウマの同定技術などの基礎を身につけています。

ルブナ・オマルは、シリア出身の国費留学生で、ダマスカス大学卒業、現在、京都大学の研究生として動物考古学の基礎を学んでいます。シリアでは、欧米の調査団を多く受け入れてきましたが、国内に動物考古学の研究者がおらず、自分が最初の動物考古学者になると意気込んでいます。

(遺物調査技術研究室長 松井 章)

埋蔵文化財センター 古環境研究室

古環境研究室では、考古学・建築史・美術史などの分野の木質古文化財、ならびに過去の自然災害などで埋もれた木材などを、年輪年代法によって年代測定しています。

年輪年代法とは、木材の年輪幅の変動変化を調べることでその木の伐採年代や枯死年代を求める方法です。この方法は、調査対象試料中の各年輪が形成された年を一年単位で決定でき、得られた年代に誤差がないという点では数ある自然科学的年代決定法の中でもとりわけ優れた方法です。

当研究室では、1980年よりこの年輪年代法の研究に着手し、現生材、建築古材、遺跡からの出土材など様々な木材の年輪幅の変動変化を10ミクロン単位の精度で計測し続けてきました。その数は8000点を超えます。現在のところ、スギで紀元前1313年から現在まで、ヒノキで紀元前912年から現在までの約3000年分のデータの蓄積があります。

当研究室の今年の主な研究成果としては、国宝宇治上神社社殿、国宝法隆寺西院伽藍の年輪年代測定があげられます。宇治上神社本殿は、建築様式から平安時代後期の年代が比定され、神社建築としては最古のものと考えられてきました。当研究室でデジタルカメラによる年輪撮影を行い、年輪年代を調査したところ、本殿内の内殿三社の年輪年代がいずれも1060年頃と判明し、これまでの通説どおり現存最古の神社建築であることを実証しました。

法隆寺西院伽藍の創建年代については、よく知られているように再建説・非再建説が100年間にわたって論じられてきました。2年間にわたる年輪年代調査の結果、金堂の外陣天井板から667年～669年、五重塔の心柱から594年、五重塔の雲肘木から673年、中門の大斗から685年の年輪年代が判明しました。これらの結果により法隆寺論争も新たな局面を迎えることになりそうです。

また最近では、彩色・漆塗・金箔貼などが施されていてこれまでは年輪年代調査の難しかったような対象でも、マイクロフォーカスX線CT装置を使用して非破壊で年輪幅を調査する方法を開発・実用化しました。この方法はとりわけ、木彫像や漆工芸品などの美術品関係分野での応用が期待されています。

(古環境研究室長 光谷 拓実)

キトラ古墳の調査（飛鳥藤原第135次調査）

四神・十二支と日月・天文に彩られたキトラ古墳の石室は、盗掘孔から流れ込んだ土砂で埋まっていました。これを発掘して棺の型式や副葬品などの遺存状況を確認する調査を、6月から7月にかけておこないました。今にも落下しそうな壁画に注意しながらの調査ではおぼつかないので、壁と天井を保護するステンレス製の椀（通称：鳥かご）を石室内に組み立て、その中で作業をおこないました。檀原考古学研究所および明日香村との共同調査です。

盗掘孔からの流入土は南で分厚く堆積していましたが、その下に厚さ5cmほどの漆片の堆積層が石室全面に広がっていました。漆塗り木棺が盗掘で砕け、水没と乾燥を繰り返した堆積層です。

壁画の処置が急がれたこともあり、堆積層表面でみえた遺物は取り上げましたが、それ以外は漆片を掘り下げることなく、漆堆積層を20×25cmのブロックに切り分けコンテナに入れて石室外に出しました。

現場で確認できた出土品には、琥珀玉、刀装具片、木棺に付属していた金銅製飾金具と銅製釘隠、さらに被葬者の頭蓋骨片と歯、などがあります。鏡はありませんでしたが、その内容は高松塚古墳やマルコ山古墳と共通します。刀装具片は楕円形環状をした鉄製の帯執おびとり金具と推定され、外面に金象嵌があり、内側には銀板を張っているようです。被葬者は性別不明ながら、壮年から老年と推定できました（京都大学片山一道教授による）。

現地の発掘は7月9日に終わり、引き続いて壁画の保存処置と危険箇所の取り外し作業が、東文研と専門技術者によっておこなわれました。発掘で持ち出した石室内の土は、順次コンテナごとX線写真を撮ったのち洗浄を進めています。なにが入っているか、乞うご期待。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部 花谷 浩）



金銅製忍冬文鑲座金具

長谷寺本堂の調査

この調査は、昨年3月3日の倒木で破損した屋根の修理を契機とし、その足場を利用し実施しました。考古・史料の研究員の協力を得て、^{むなふだ}屋瓦や棟札や、指図、文献史料などを調査し、『重要文化財 長谷寺本堂調査報告書』を刊行しました。

文献によれば、本堂は天文5年(1536)に焼失し、同7年には像高10m余の現本尊が造られました。それを覆う本堂は、大和郡山城に入った豊臣秀長によって天正16年(1588)に再興されました。その後、被災記事がないにもかかわらず、慶長12年(1607)の上棟など、本堂の造営記事が散見します。現本堂は、棟札から慶安3年(1650)の供養が明らかのため、秀長の建てた本堂を骨格として、慶安3年に完成したのが現本堂と考えられてきたのです。

しかし調査の結果、増改築を示す痕跡はほとんどなく、まったくの新築であることが判明しました。また、細部意匠を他の同時期の建築と比較すると、現本堂の年代は慶安年間頃に編年できます。棟札によれば、現本堂の造営には、将軍・徳川家光の援助を得て工匠には当時の天皇の御所造営をおこなった精鋭たちが招集されたことがわかります。筆頭棟梁と思われる今奥和泉守は、現在の東寺五重塔の棟梁でもありました。

すると、天正16年に豊臣秀長が建てた本堂の材料は、現本堂には使われなかったこととなります。豊臣家造営の本堂がわずか50年ほどで傷むとは考えられず、この造営には建築的問題とは別の、何らかの社会的な理由が潜んでいると思われます。

なお、調査成果の一部は、飛鳥資料館の企画展「豊山長谷寺本堂」（平成16年8月6日～31日）で公表し、棟札や指図、新出の文献史料など、本堂の写真をまじえて展示・解説しました。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部 箱崎和久）



長谷寺本堂全景

飛鳥資料館のみどころ (6)

- 秋期特別展示「古代の梵鐘」 -

飛鳥資料館では、毎年春と秋の2回、特別展示をおこなっています。今年度の春期特別展示は奈文研ニュース12号でご紹介したように「飛鳥の湯屋」と題しておこないました。今回の秋期特別展示は、「古代の梵鐘」と題して、10月8日(金)から11月28日(日)の期間(会期中無休)で開催します。

当館は飛鳥地方の歴史と文化を紹介する歴史系博物館として昭和50年に開館し、これまで飛鳥時代にかかわる文化財や発掘資料の公開と展示をおこなってきました。また、平成13年度からは東アジアの金属工芸史の研究をテーマに調査研究を進めております。今回、飛鳥時代・奈良時代の文化の理解と調査成果の公開を目的として、飛鳥時代・奈良時代の梵鐘をテーマに展覧会を企画いたしました。

飛鳥寺の建立(588年発願)にはじまる仏教文化の確立は、文化史上にも様々な変化をもたらしました。そのなかに寺院の建立にともなう金属工芸品の登場もあげられるでしょう。梵鐘もそのひとつです。技術的にみても梵鐘をはじめとする大形の青銅鑄造品は、飛鳥寺の建立に参加した鑪盤工

にはじまる技術と推定されます。ただ、寺院のみにとどまらず、時報鐘として漏刻での使用が斉明朝(655 - 661)にみられるとともに、天武朝(673 - 686)には大鐘の貢献の事例も知られ、飛鳥時代社会の中で一定の役割を示していたといえるでしょう。

今回の展示では、飛鳥時代・奈良時代の梵鐘を金属工芸史の中で位置づけ展示をおこなうとともに、飛鳥時代から奈良時代にかけての梵鐘の変遷を、実際の梵鐘を展示することによって理解していただき、仏教導入期の日本における青銅製品生産の実態を明らかにすることを目的としています。また、梵鐘を吊る建物・鐘楼について、写真パネルで紹介するとともに東大寺鐘楼模型(1/10)も展示いたします。

展覧会を記念して国際シンポジウム「東アジアの梵鐘」を下記日程にて開催しますので、あわせてご来聴いただければ幸いです。皆様のご来館をお待ちいたしております。

(飛鳥資料館 西山和宏)

< 国際シンポジウム >

11月5日(金) 午前10時から(参加費無料)
会場 / 橿原ロイヤルホテル

記 録

埋蔵文化財センター研修

一般課程一般研修

平成16年6月15日～7月23日 12名

文化財写真課程専門研修

平成16年8月18日～9月17日 7名

古代交通遺跡調査課程専門研修

平成16年9月28日～10月6日 10名

遺跡環境調査課程専門研修

平成16年10月14日～10月24日 13名

現地説明会・報告会

キトラ古墳石室内発掘調査 報告会

平成16年7月24日(土) 午前10時30分～5回報告

飛鳥藤原第134次(石神遺跡第17次)発掘調査

平成16年9月23日(木) 午後1時30分～

平城第374次 名勝旧大乘院庭園発掘調査

平成16年9月25日(土) 午後1時30分～

国際講演会

平成16年10月2日(土) 午後1時～

- 中国都城研究の最新成果 -

白雲翔、安家瑶、汪勃、何歳利の各研究員

(中国社会科学院考古研究所)

講演会

平成16年10月18日(月) 午後1時30分～

光谷拓実 埋蔵文化財センター古環境研究室長

「年輪年代法と歴史学の最前線について」

(NPO平城宮跡サポートネットワークと共催)

お知らせ

秋期特別展示

「古代の梵鐘」 於：飛鳥資料館

平成16年10月8日(金)～11月28日(日)

国際シンポジウム

平成16年11月5日(金) 午前10時～

於：橿原ロイヤルホテル

「東アジアの梵鐘」

公開講演会

平成16年10月30日(土) 午後1時30分～

町田章 所長

於：平城宮跡資料館

「考古学よもやま話 - 冥界への旅立 中国と日本 -」

中島義晴 文化遺産研究部研究員

「庭園の修復と復原整備」

豊島直博 平城宮跡発掘調査部研究員

「刀と剣の変化からみた古墳時代のはじまり」

編集 「奈文研ニュース」編集委員会

発行 奈良文化財研究所 <http://www.nabunken.jp>

Eメール jimu@nabunken.go.jp

発行年月 2004年9月